

# 浦賀文化

## 中島三郎助招魂碑

浦賀の愛宕山公園の山頂に中島三郎助の招魂碑があります。明治二十四年(一八九一年)、臼井儀兵衛をはじめ、彼を慕う浦賀の有志により、公園が整備され碑が建立されました。

浦賀奉行所の役人・中島三郎助は、「与力」という職に就いていました。

今から二百九十五年前の享保五年(一七二〇年)に設立された浦賀奉行所において与力というのは、奉行所の筆頭である「奉行」を補佐する役職として十名ほど置かれていました。中でも、中島三郎助は筆頭与力という、文字通り与力の取りまとめ役を担っていました。各与力は、部下として十人程度の同心を抱えていました。

中島は、ペリーが初めて浦賀沖に來航したとき、最初に黒船に乗り込んで折衝したことで知られています。明治二十五年に浦賀の愛宕山に建てられた「中島三郎助君招魂碑」は、中島三郎助が二人の子息とともに函館で討ち死にするまでの半生を刻んでいます。

石碑の上部にある題字は榎本武揚、本文は幕末から明治にかけて外交官として活躍した田邊太一が作成しました。台座の部分を除くと三浦半島最大の大きさといいいます。石碑に刻まれた文の成瀬温(賜硯堂)による筆跡もみことなものがありません。

なお、碑の石は、浦賀の大商人である大黒屋儀兵衛こと臼井儀兵衛により、彼の所有する船で仙台の塩釜神社から運んだものといわれています。今回は碑文の内容について概略をご紹介します。



\*\*\*

榎本武揚が石碑の題字を書く。明治初年、大政奉還がなされて新政府がつくった兵が東北から北上して函館まで攻めてきた。函館の千代ヶ岡に陣を構えていた中島三郎助はこう言った「私に味方する兵は新政府軍と数ヶ月にわたる戦を交えてきた。徳川幕府を支えてきた人々のために死ぬことを覚悟の上で戦う。武器は古く傷みが激しい。しかしできる限りのことをして敵を滅ぼし、我らも討ち死にしよう」と誓った。二隻の軍

艦も弁天台のとりでも陥落した。さらに新政府軍は千代ヶ岡のとりでを包囲した。

中島三郎助君と二人の息子・恒太郎と英次郎をはじめ部下も皆戦死した。明治二年五月十六日のことである。中島君は本名を永胤、通称を三郎助といった。生まれは浦賀奉行所与力の家である。天保八年(一八三七年)、外国船(モリソン号)を駆逐したことで幕府から賞を受けた。嘉永六年(一八五三年)、アメリカの黒船が來航すると、中島君は身を挺して事に当たった。これにより中島君の名前が知られるようになった。「鳳凰丸」と「晨風」という二隻の軍艦製造に当たった。日本人の中で西洋式軍艦の製造方法を知る者は少なかったため、幕府は中島君を重く待遇した。

安政二年(一八五五年)、幕府の命令により長崎海軍伝習所に入りオランダ人から航海や造船の技術を習得した。長崎での修行を終えると軍艦操練所教授に任命された。オランダから購入した開陽丸は、慶応三年(一八六三年)神奈川に到着した。中島君は軍艦役に起用されて開陽丸に乗った。開陽丸は江差に差しかかったとき座礁して壊れた。その後、中島君は、千代ヶ岡の戦いに亡くなった。君は痩せており着物がなじまなかった。和歌や俳句に通じ、武士道

を重んじていた。人々への施しを好み、正義の道に発奮し、古風な武士の風采を持っていた。いったん事に当たっては一命をも顧みない勇気があった。中島君が戦死したのは四十九歳のとき。長男、次男もそのとき亡くなった。三男の与曾八は、まだ赤ん坊だった。今では中島家を継いで海軍士官になっている。中島君が浦賀奉行所にいたとき、土地の人々に喜ばれる仕事をした。今、中島君の二十三年忌にあたり、浦賀の人々が官民間わず相談して愛宕山に石碑を建て、追慕の気持ちを表したい。君に対する浦賀の人々の敬愛の心はいつまでも尽きることがない。こうした思いから石碑の建立に至ったのだ。また、君への思いを込めた詩をつくり、石に刻んだ。「君の死や烈日月と輝きを争い、君の生や恵郷里追思す、意埋血の既に碧く、乃ち墮涙の碑有り、魂、知る有り、豈南枝を恋う無からんや」と。

\*\*\*

去る五月十七日、函館市中島町で中島三郎助父子の碑前祭が行われ、浦賀からも五十余人の有志が参列しました。

(芳賀久雄)

★参考文献  
・『中島三郎助―浦賀奉行所の与力同心衆』 多々良四郎



# 歴史 語りい座・浦賀 四十二

郷土史家 山本 詔一



## ●『近世浦賀畸人伝』VI●

—修験魯恭—

魯恭は永神寺の住職であり、法諱は快辨(かいはん)といった。永神寺は現在の東叶神社のことであり、江戸時代には古義真言宗醍醐寺派三宝院に属する修験の道場であった。

魯恭は厳しい修行に耐え、成績優秀により醍醐寺門主から直接に教えを受けた。これにより彼は、修験僧として高い位を得、三浦郡はもとより、鎌倉郡と久良岐郡(現在の横浜市金沢区・中区・南区・磯子区など)にある醍醐寺派の総領として活躍した。

永神寺は修験道場として神奈川の中核であり、常に多くの来訪者があつた。この来訪者をもてなすためであるうか、江戸時代後期の永神寺には料理人がいたことがわかっている。この料理人は来訪者だけでなく、村役人の就任披露の宴席などにも腕をふるっていた。

魯恭の教養の高さは、広く和漢の書籍に通じていたことから窺(うかが)い知れるところである。この他にも池坊の門弟として立花(りやが)を行い、同じ池坊の門弟で東浦賀(りやが)に住む、樋口橋(きこうはし)は生涯を通じて深い友情を交わした。また、道具の使い方もひとつの方法でなく、そこに少し何か加わると

もつと便利になるということを常に考えている人であった。さらに、宝生流の謡曲でもすぐれた腕前の持ち主であった。その上、囲碁・将棋から蹴鞠(けまり)までする風流人(ふうりゅうじん)で、お酒を飲みさまざまな階層(かいそう)の人々の話を聞く大きな志(こころざし)を持った人であった。

文化元年(一八〇四)十一月に六十五歳でその生涯を閉じた。魯恭についてはこれ以上に詳しい記録が残っていないのが残念だが、こうした人物が浦賀にいたということだけでも江戸時代後期の浦賀の文化度の高さを知ることができる。

—西郷吾涼—

幼い時の名は嘉吉(かきち)といい、十二才の時に天然痘(てんぜんとう)に罹(かか)って失明した。その後、成人してから「松意」と名乗り、のちに「陶意」とあらため、針治療(はりじりょう)を仕事とした。

吾涼は豪快な性格で、視覚に障害を持っていたにもかかわらず、まったくそのことを感じさせないほど、物事に臆(おそ)えることがなかった。こうした性格はある意味では強情(こころづか)ともとられ、自分が言い出したことは、よいことも悪いことも貫(ぬ)き通すほどであった。これもまたひとつの才能であると思わせるところがある。

吾涼は、中国の後漢時代に活躍した「医聖」と言われた張仲景(ちやうちゆうけい)の

『傷寒論(しやうかんろん)』や孫子の兵法書を好み、そのすべてを誦(そと)んじていたという。試みに「これは？」と尋ねると、どの本の何ページに書かれていると答えるほどであった。

また、日頃から、医師の渋谷杞柳(しやぶきりやう)や村役人の石井士口(いしゐしこう)らと将棋(しょうぎ)を指していた。数日後に「あの対局(たいきよく)は？」と尋ねると、縦横(じゆうぎやう)の駒(こま)の位置(ちゐ)を正確に言い当てた。

吾涼は、俳諧(はいかい)を楽しみ、方言研究家として知られる越谷吾山(こさ)を師とした。

『畸人伝』に掲載される次の二句は、どちらも浦賀湊(うらがみなと)を詠(よ)んでいる。まるで目がみえているかのように。

朧月(らうげつ) しばらく有りて 船の敷  
おもむろに わか景(かげ)が中を 白帆(しろぼね)かな

さらに、平砂(へいさ) (皐月(こうげつ)平砂(へいさ)で吾涼が師としたのは三代目の人物(ぶつ)と思われる。別号(別号)万葉庵(まんやえん)に師事(しじ)している。文化五年(一八〇八)十月、四十八歳でその生涯(せいぎ)を閉じた。



## 笑話一題

久保田万太郎の句に  
うすもののみえすく嘘をつきにけり  
という句がある。  
「嘘つき！」と罵(のの)って去(い)った女(おんな)がいた。人は嘘をつく動物(どうぶつ)だ。嘘のない人生(じんせい)なんてつまらない。  
そういえば、最近(さいきん)嘘をついていない。まだまだ嘘をついてみたいものだ。  
万太郎の句には人生(じんせい)がある。人生(じんせい)の深淵(しんえん)を覗(のぞ)き見る思(おも)いがする。  
年寒(としがひや)しうつつる空(そら)よりうつつす水(みづ)  
人情(にんじやう)のはろびしおでん煮(に)えにけり  
走馬燈(しやうまどう)いのちを賭(か)けてまはりけり  
しみるねえ  
(TOMMY)

## ～俳句の散歩道～

沖で鳴く霧笛(きりふエ)に春の目覚めかな 手塚登喜子	海舟の断食跡(だんじやくあと)や深みどり 田島清一郎
-------------------------------	-------------------------------

## 浦賀コミュニティセンター分館からの ☆お知らせ☆

当館(とうくわん)玄関(げんかんに)に俳句(はいく)の掲示板(けいじばん)を設置(ていし)しました。ご投句(とうく)頂いた中(なか)から優秀(ゆうしゆう)な作品(さくひん)を順番(じゆんばん)に掲示(けいじ)しております。さらに、最優秀(さいゆうしゆう)作品(さくひん)は本誌(ほんし)「浦賀文化(うらがぶんか)」にも掲載(けいざい)いたします。(→)投句箱(とうくば)は、玄関(げんかんに)でございますので、お気軽(おそげ)にご投句(とうく)ください。

